

例について検索し、病理形態発生について次のような知見を得た。

大動脈炎（増生性炎）の病変としては、まず中膜組織の膨化・融解化が見られ、ついで中膜外層部から中膜～外膜境界部にかけての限局性の組織の浮腫融解化と小円形細胞浸潤が見られる。ついで血管増生が見られ、増生性炎が始まる。中膜～外膜境界部に始まつた増生性炎は漸次中膜内層へ病変を拡げる。増生性炎の拡がり方とその炎症の性質とによって、大動脈炎は基本型、外膜型、ペーチェット病型に分類される。

15. ゼミノームの放射線治療成績

小沢 弘侑（千大大学院）

ゼミノームは放射線治療によく反応する疾患とされているが、放射線単独治療は少く、むしろ、術後照射の方が最も広く行なわれている。千葉大学放射線科において、昭和30年1月より昭和43年12月までの14年間にゼミノーム34例を経験した。そのうち追跡可能な33例について、放射線治療成績およびその術式について検討した。年齢分布では30歳台が多く、20～40歳台で全体の90%を占めている。左右別発生頻度は右が左の約2倍であった。進度分類はNotterのstaging法によった。昭和37年以後は⁶⁰Coを用いて、4～8週間でT.D 2500～3500rad照射するようにした。治療成績は、Stage Iの5年生存が82%であったが、Stage II, Stage IIIは零であった。全例の5年生存率は62%であった。最後に必要にして充分であると思われる照射野について検討を加えた。

16. 熱電効果によるネコ脳皮質血流の研究

山浦 晶（千大大学院）

銅・コンスタンタン熱電堆をもつ測定素子を用いて硬膜外より脳皮質に限局した血流を測定する方法を考案した。この方法には、脳実質に損傷を与えない、髄液の濾出がない等の利点がある。以下の結果を得た。①クラレ化ネコにおいて著明な血圧動搖がみられ脳皮質血流はこれに全く依存した動搖を示す。②呼吸の変化に敏感に変動を示す。③エピネフリン、ノルエピネフリンおよびイソプロテノールは脳皮質血流には直接作用を示さない。アセチルコリンは著明に血管を拡張する。なおエピネフリン静注時および三級動搖L波の血流～血圧関係は酷似している。④その他の血管作動物質、乳酸は著明に脳皮質血流を増加させ、この作用はH⁺によるものと思われた。カリウムイオンにも著明な脳皮質血管拡張作用をみとめる。⑤ベンチレンテトラゾールにより誘発さ

れた発作中、血圧上昇の影響をはるかにこえた血流増加がみられた。

17. 胃癌患者血清中の胃癌特異抗原の所属について

吉川広和（千大大学院）

胃癌患者血清のα-グロブリン分画中に、胃癌に特異な抗原があり、しかも、胃癌組織から分離したマイクロゾームにも、多量に含まれているところから、この抗原の由来を胃癌細胞のマイクロゾームに求めたことは、既に岩崎、渡部らによって報告されているところであるが、この抗原の所属について更に検討を加えていたところ、たまたま、胃癌末期患者で、ABO式血液型の転換した症例に遭遇した。血液型転換の原因を究明したところ前記胃癌特異抗原とも反応する自己抗体による血球の感作が原因と考えられたので、この抗体の特異性を検討することによって胃癌特異抗原の所属を求めた。

既知の抗原を使用した分析では、この抗体は、広義のO抗原に対応するものであり、胃癌特異抗原との反応もL-コースによって抑制されるので、胃癌特異抗原は、広義の抗原に所属するものようであった。

18. 食道内圧筋電図同時記録法による食道運動の研究

黄 江庭（千大）

従来食道機能検査において、内圧測定と筋電図は、それぞれ別個に施行されてきたが、今回私は内圧筋電図を1本の誘導管により、同時に、かつ同一部位で記録する方法を考案し、この方法を犬および臨床例28例に施行し、2,3の知見を得たので報告した。

人に使用した内圧筋電図誘導管は過去に報告した筋電図電極誘導管にポリエチレンチューブをオプンチップとして各環状双極電極間に開口せしめたものである。これを静止圧にて規定した上中下部食道へ口より挿入し、各誘導管を增幅記録装置に連結した。これを正常人5例につき空嚥下各5回施行させて得た内圧の陽性波および筋電図の発現時間、持続時間、波高、振幅を検討した。発現時間についてみると、内圧筋電図共に時間のずれをもって、上部から下部へ波及している。両者の関係は上部ではほぼ同時に発現しているが、下部にいくにつれて、筋電図が陽性波に先行して発現した。持続時間では内圧筋電図共上部から下部にいくにつれて長くなる傾向がみられた。両者の関係をみると、筋電図よりも陽性波の方が長い持続時間を示した。内圧波高と筋電図振幅では明白な相関関係はなかった。次に特発性食道拡張症の16例につき、2,3の症例についてその内圧筋電図の所見を示した。